

タイトル：平成 30（2018）年度 教育セミナー（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「イスラーム復興現象としてのアレヴィー復興——トルコ都市部におけるアレヴィーの実践に関する人類学的研究」

今城 尚彦（東京外国語大学大学院）

教育セミナーについては以前から学内ポスター等で知っていましたが、留学などでなかなかタイミングが合わず、今回初めて参加しました。ゼミの外で発表する経験がなかった、修士論文執筆へのスタートダッシュとして活用したかった、というのが今回の参加動機です。

先生方のセミナーで特に参考になった点は、論文や書籍を読んでいる中ではあまり見えてこない、研究のプロセス、裏話をたっぷり聞くことができた点です。もちろん論文や書籍を読むことで書き方や作法を盗むことはできますが、そのプロセスについて時間をとって説明して頂ける機会は貴重なのではないのでしょうか。

また、同年代の大学院生と 4 日間に渡って研究の話ができたのはとても楽しい時間でした。特に修士論文に取り組む院生と話し、自分の進捗を改めて認識したことは、修論提出を控えた自分にとって良い意味での焦りにつながりました。他の受講生の発表も非常に興味深く、聞いているだけで大変勉強になりました。なにより受講生からたくさんの質問やコメントが飛び交う様子が非常に刺激的でした。先生方から出たコメントでも、例えば今後の発展性や問いの立て方など、誰にとっても課題になるようなものが多く、常に自分を反省しながら聞く時間でした。

発表をしたいと申しこんだ教育セミナーでしたが、8 月末まで追加調査に出かけていたこともあり、限られた時間の中で焦燥感と戦いながら準備を進めました。結局、調査データをまとまりのある形に整理することに難航し、一貫性のある議論を取り繕うのに精いっぱいだった、というのが発表を振り返った今の正直な気持ちです。

しかし私にとっては、何とか見せられる形にしようと試行錯誤するプロセスにたくさんの学びがありました。自分の研究を整理しようと頭をひねる中で、自分の理解が不足している点がよくわかったというだけでなく、まったく進んでいなかったデータ整理を集中して行う良い機会になったと思います。頂いたコメントでも、分析概念の使い方に問題があることや、研究の問いそのものの欠陥など、修士論文に向けて早急に取り組まねばならない根本的な課題を自覚することができました。

私のように周りより研究が進んでいないからといって、気後れすることはないと思います。発表の出来栄を評価することではなく、それを改善することを目的としている教育セミナーだからこそ、先生方や受講生のみなさんの胸を借りるつもりで発表を申し込んでみてはいかがでしょうか。